





鳳  
仙  
花

中  
上  
健  
次



中上健次（なかがみ・けんじ）  
一九四六年、和歌山県新宮市に生まれる。和歌山県立新宮高校卒。上京後、労働の傍ら小説を書き続ける。七六年に『鯉』で芥川賞を受賞、『枯木灘』で七七年、毎日出版文化賞、七八年、芸術選奨新人賞を受賞する。著書として他に『十九歳の地図』『鳩どもの家』『蛇淫』『十八歳・海へ』『化粧』『水の女』などがある。

## 鳳仙花

一九八〇年一月二五日第一刷発行  
一九八〇年二月二五日第二刷印刷

定価一三〇〇円

著者 中上健次

発行者 寺田博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四  
〒101 電話(〇三)二六二九七五三  
振替口座(東京)六一二七一八三

印刷・製本 図書印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)

鳳仙花——目次

光	花	兄	男	血	水	町	川	櫛
130	115	99	83	68	53	37	22	7

水  
の  
日

348

地  
の  
熱

287

松  
の  
雨

227

雨

204

熱

192

子

175

日

162

風

146

装丁菊地信義

伊藤若冲筆「花丸図」より  
(金刀比羅宮蔵)

鳳  
仙  
花





紀州の海はきまって三月に入るときらきらと輝き、それが一面に雪をふりまいたように見え  
た。フサはその三月の海をどの季節の海よりも好きだった。三月は特別な月だった。海からの道  
を入れてフサの家からすぐそばにある寺の梅が咲ききり、温い日を受けて桜がいまにも破けそう  
に蕾をふくらませる頃、フサがいつも使い走りする度に眼にする石垣の脇には、水仙の花が咲い  
ている。今年もそうだった。その水仙の花を見つけた時、近所の酒屋の内儀から「はよ、走って  
行って来てくれ」と言いつけられた小間使いを忘れて、走るのを止め、肩で息をしながらしぼら  
くみつめていた。その白い花卉の清楚な花が日にあたっていろのをみつめていると、胸の辺りが  
締めつけられて切なくなり、涙さえ出た。

その花が咲く度に春が来る。フサが生れた三月七日という日が来る。フサはその日がまもなく  
来て十五になると思い、紀伊半島の、一等海にせりだした潮ノ岬の隣の古座こざというところに根付  
いた水仙の一群が、日を受けて花を付けているのを見て、人の都合や思いの届かないところに、

人も花も石垣も包み込むような大きなものがあるのかもしれない、と考えたのだった。

フサは伶俐な娘だったが、元より十五になるうとする子に、隣近所の老婆らが口にする有難い阿弥陀如来の話も、三人ほどいる兄らが古座の集会所に来た講釈師を聴いて「涙が出たわい」と言う石童丸の話の内容も、充分解るはずもなかった。ただ、老婆や母が言う、思わず有難うございますと手を合わせるようなものが、この石垣の脇に、人にふり返りもされずに咲いている花を包んでいると思ひ、早く使い走りに行かなければ内儀から小言を喰うと思ひながらも、立ちつくしていた。

三月七日は四日あとの事だった。フサの母親も、福井まで出稼ぎに行ってもどつて来たばかりの幸一郎という齡の離れた一番上の兄も、フサが昼だけ小間使いや子守りをする酒屋からもどつてもすっかり忘れてしまったように他事にかまけていた。フサはそのことを、いつもの事だと気にかげなかつたが、心の中では、自分のあの秘密を母や兄が思ひ出したくないからだと思ひ、芋を蒸すためにかまどに火をおこしてわざとけづらせ、それにむせるふりをして泣いたのだった。

三月のものはすべて好きだった。フサは海辺に立ち海を見ながら、三人いる兄らが、古座から船に乗り汽車に乗り出稼ぎに行つた先で眼にし「言うて」とせつくフサに語ってくれるきらきら光る雪の野原、雪の山、いち時に咲いた金沢のケンロクという所の大木の桜を、いつもそうするやうに海に重ね合わせてみた。青い海は沖の方までさえぎるものなく日にきらめきながら風に波立っているが、その海を兄たちの見た雪で飾るなら、それはこの古座に住む者の誰も眼にした事のない風景だった。雪の海は眩しかった。兄が話す、怖ろしいほど沢山の花が重なり合つたケン

ロクという所の桜をこの海に敷きつめたなら、フサが毎日通って守りをしている、酒屋の一歳になる女の子に飾った雛人形よりも綺麗になる。

フサは雪のはねかえす光が眩しいというように眼を細め、その雪の海の方へ、かりかり音たてさせながら歩いた。潮風が吹きつける。髪が乱れてその髪の間から飛び出した耳が冷たく、フサは手でおおいこすった。いつも夜聴える潮鳴りのような音が耳に立ち、温く熱くなってくる。

フサはそのほてった温い耳に、潮風が心地よくあたるのを感じながら、波の前に立ち、その打ち寄せては返す波の呼吸のような動きを見ながら、夜半、ふと眼ざめて母の寝姿を見ていたの思い出した。

眠っている母は、昼間とは違い随分年老いて見えた。母の静かな寝息といまにも土間の昏くらりまで這い寄って来そうな波音が重なり、母が三人の兄や三人の姉には話しても、自分には話さない事が、ふと思ひ出された。兄や姉たちがつくりあげ、近所の者らが真に受けたことが、嘘ではなくて本当だったと、あらためて思った。フサはいっそ海の中に溶けてしまいたいと思ひ、それから、自分では誰にも言わず、黙って姉たち三人のように他の土地の紡績に働きに出れば済んでしまう事だと思ひ直し、笑みを顔に浮かべてみた。

フサは近所の誰よりも色が白く、眼鼻立ちの整った器量よしだった。だがそれがフサに重荷だった。一度、一等上の兄の幸一郎が、たまたま山仕事で近所の若衆と一緒にあった時、「別嬪さんで大島へでも尾鷲へでも、遊廓じゃったら高い金で売れるんと違うんか」と、フサについて若衆が言だったので喧嘩になった事があつたが、フサはその時も、体に出来たアザを見せている兄の

幸一郎を見て、単にフサの器量ではなく、兄や姉たちの誰とも顔つきが違ふというあの事が、喧嘩の原因だということを知っていた。

フサはたまらなくなり、波に足をつけた。

そのフサを松林の方から誰かが呼んだ。声の方を振り返ってフサは松の幹に手をかけて、フサより六つ離れただけの吉広が立っているのを見つけた。吉広は海が眩しいと眼を細め、

「今、来たんじゃ。ええもん買うて来たった」

と手招きし、大声でフサにすぐ家へ来いと言った。

駆けて来て息を弾ませながら横に立ったフサの頭を吉広は子供にするようにくしゃくしゃと撫ぜた。フサは吉広にそうされる事が嬉しいのに、

「もう子供と違ふのに」

とふくれっ面をつくって見せた。

随分大きくなった、と吉広は言った。

吉広は一年ほど他所の土地へ働きに行っていたのだった。吉広の体から他所の土地のおいが立っているような気がした。フサは長い間、古座にいなかったその一等下の兄の吉広に、海と川と山しかないこの古座とはまったく違ふ他の土地の話を一どき時に聞きたかったが、吉広が自分のそばに立って白い歯を見せて笑みを浮かべていると思うと、駆けて来た息の弾みが悲しくて、べそをかきかかった。吉広にみつめられるのが羞かしくもあった。

吉広はそのフサには頓着しないで上衣に手を入れ、「ほら、これ」と緋色の和櫛を取り出して

見せた。その兄の手の甲に今まで眼にした事のなかつたような傷跡があつた。それをみつめて  
いるフサの髪に、吉広は「どら」と身を屈めて和櫛をつけた。

吉広はフサの顔を身を屈めたまま左右から見て、独りで得心したようにうなずき、「よう似合  
うど」と言った。

「家へ荷物置いてすぐ母さんに訊いて、フサが去年の春頃から、斎藤へ子守りに行つとると言う  
から、斎藤へ行つてみたら使ひに出とると言う。それでしようなしに家へ帰ると廻り道したら、  
このベツピンさんがここにおつた」

吉広は言い、それからフサの顔をのぞき込むように見て、フサの黒目がちの眼に、他所の土地  
の出稼ぎから帰つた自分が映っているのを確かめてから、「フサも、もう十五になるんじゃね」  
と言ひ、今度は一人前の娘にそうするように、フサの髪にうしろから手を触れる。

フサは兄の吉広に言われて、ふと、自分が母のそばにいつまでもいられる年齢ではなくなつて  
いるのを知つた。三人の姉は、フサの齡ではもうすでに他所の土地の紡績工場に働きに行つてい  
た。

先に立つて歩く吉広は、子供の頃に何度も通つた浜の松林から製材所の塀横を抜ける近道を通  
らずに、遠廻りして川口に一旦出て、海からの潮風を防ぐために丸い石を積みあげた石垣の横の  
坂道を抜けて、家の前の狭い道に出た。フサは自分の前を大腿でゆっくりと歩く吉広に、一年前  
に出稼ぎに行った時とまったく違わない状態で、川口には舟がある事を言ひたかつた。だが、吉  
広は、男にはそこが昔のままであらうとなかろうと興味はないと言ふように、振り返りもせず

歩いていく。

その川口は、古座で生れた子供らには夏の格好の遊び場所だった。船が何隻も絶えず入っていた。海岸が、岩場かそうでなかったらこの古座のように波打ち際から急に深くなっているところなので、漁師たちの船は川口に繋ぐしかないし、それに山また山のこは、道路をつけようにもつけられない。それで何もかも川に頼ったので、子供らの何人かは川遊びをしていて船の下に潜ったままだったり、山から切り出し筏に組み川を流して来て船に積みかえる、その筏の下に入り込んだまま溺れて死んだ。だが、船くぐりも筏くぐりも面白い遊びだった。泳ぎを覚えるには、あの筏とこの筏の間と目安をつけるのが一番便利な方法だった。フサもそうやってこの川で泳ぎを覚えたし吉広もそうだった。

家にもどって思いがけなかったのは、日置川奥の田ノ井の叔父も来ている事だった。叔父はいつものように、上半分脱いで赭らんだ肌を見せて酒を飲んでいた。叔父はフサを見つけると、手招きして、横に置いてある一升瓶を持ってこの茶碗に酒をつげと言い、フサが母の眼の合図に促されてそばに坐って酒をつぐと、「よし、よし」と一人でうなずいて茶碗を置き、脱いだ服のポケットをさぐって、「あんまり金ないんじや」と言い、それでもフサの一月分の子守り賃にあたる金を取り出した。フサはその叔父が、随分以前から古座へ来る度に、母にそれまで外で働いた金の大半を渡してやっているのを知っていた。それが子供心にも、叔父が七人の子を抱えた母を不憫だと思つての事だろうと、推測された。

フサは母を見た。母がうなずいた。

母の顔に暗い翳りのようなものがあるのを知り、フサは思い出した。

その話を母は、何度もフサに語った。

フサの母は、遅く生れたフサにむかって、まるで洗いざらいぶちまけて話す事が、フサに対する自分の唯一の務めのように、夜、雨が降り風が出て眠れず、いまにもこの家を飲み込んでしまふというフサに、「津波や洪水が、こんなふうな雨で起きよかよ」と言つて笑い、母が子供の頃の話をしはじめた。話に出てくる母の父親は、フサからは祖父になるが、フサが見た記憶はなかった。祖父はよく、田ノ井から古座川奥を山を越えて歩いて古座のこの家にまでやつて来て、母やその子らに食べさせると、田ノ井の畑でつくった物、豆や南瓜やウリを持って来た。それらのことごとくは、何十時間もかけて歩いて来て、日にさらされているので、萎れていかにもみずぼらしかった。

「爺、こんなに萎れてしもとるわだ」と或る時、幸一郎が祖父に言う。「豆も南瓜も田ノ井だけにしかないんやったら、萎れてもしようないけど、古座にも売っとる」

母のトミの話には、声色が入っていた。フサはそのトミの話をまんじりともせず耳にした。その話をする時はきまつて、三人の兄らがそれぞれ外に働きに出かけて家にはトミとフサしかいない時だったので、フサはその自分の事を知る前も知った後も、四十を過ぎて生んだ遅い子であるフサに、トミが何かを教え伝えようとしてゐる事は理解した。

木犀の甘いにおいが寺の方から流れて来て、もう随分古くなった家のはがれかかった板壁から



流れ込んで来るのが分った。

フサの母のトミは、田ノ井で生れた。トミの母親は長男を生み、次にトミを生み、次男を生んですぐに、トミが五歳の時に死んだ、と聴かされていた。その作り話をトミは、育てられた祖母（フサの曾祖母）マスから聴いたのだった。実際は駆け落ちしていた。

母親がいなかったので、トミたち兄弟は、祖母が寝込んでしまうまで、ほとんど祖母の手一つで育てられたが、祖母はトミにも男の兄弟らにも母親が死んでこの世にいないと言いはしたが、決して自分の口から、男と駆け落ちしたとは言わなかった。

トミが、自分の母親が男と駆け落ちしたと知ったのは、丁度自分も、日置川の奥の山から材木を運び出している木馬引きの男と、駆け落ちしてからだ。山の斜面を利用して足場を組み、丸太を並べて軌道をつくり、木馬と呼ぶ木ゾリに、切り出した材木を何本も乗せ、その木ゾリにゆわえつけた帯ひもを肩で引くのが木馬引きだった。男はそれをやっていて、木ゾリが重いために、軌道にまいた油でいつ足を取られて木馬の下敷きになるかもしれない、危ない仕事だった。

母のトミは、古座に来た田ノ井の父親に、その木馬引きの男と世帯を持った自分を見つけられた時が忘れられないと言った。父親はそれまで、声ひとつ荒げた事のない優しい男だったが、その時も、祖母も心配しているし一緒に帰ろう、と言うだけだった。トミが、もう上の幸一郎を孕み七カ月になると言うと、声を震わせながら初めて、死んだと言ってきたトミの母親が、実は男と駆け落ちしたのだ、と言った。

父親は、トミから眼をそらした。